ソウルのカササギから御子柴先生へと

橋本　雄一

ソウルのカササギは、会いたいなあと思って天空か樹々のてっぺんを見つめていると、必ず飛んできたのだった。大陸の空気はもう冷たく、太陽の明るいもとでも指がかじかんでくる冷気の時も。農業にとっては迷惑千万というが、都会人と旅人にとってはまずはいつも手をあげて小さな挨拶を交わしたくなるような美しい翼をもった異鳥。以前見た旅順のカササギは海が好きなようで、海岸に面した丘の斜面の樹上にたくさん巣を作って飛び回っていた。ソウルでは景福宮（キョンボックン）の木立のなかにも堂々と巣を作って、青と白の羽毛を光らせて一直線に飛んでいる。

僕はカササギを見て、今なぜか御子柴先生をその異鳥に重ねる。

まずはあの御子柴先生の声。カササギはあまり鳴かない鳥だが、その長い尾っぽがシュッと延びた容姿からは意外な庶民的な声音を持っている。御子柴先生の声の音程はカササギに似ていると僕は秘かに思っている。またカササギは用心深く、もっと近くで観察し写真を撮るべく、にじり寄ろうとするやいなや、後ろ向きで居てもパッと飛び立つ。H号館４階の先生の研究室が院生たちでにぎやかなので、雑事を早く済ませて行ってみようと思う。楽しみにして十数分ほどで駆けつけると、もう先生とゆかいな仲間たちはパッと飛び立っていたのだった。４階の廊下は瞬時にして暗くなった。御子柴先生は行動形態もカササギに似ていると僕は秘かに思っている。

それでも先生のお部屋ではおいしい液体をよく頂いた。あるときロシア産のを先生と飲みつ語りつするうち、一本空けてしまったことがあった。中国産のおいしい液体と同じ度数だったが、中国のをまるまる一本、一時間で空けたことはない。僕はそのあとの帰路そうとうフラフラしていたが、先生はきちんと帰られたようで、やはりロシア文化堪能者はすごいなあと尊敬したことだった。しかし、何日かあとに御子柴先生いわく、「ハシモトくん、この前はたしか一気に一本空けたんじゃなかったっけ？　だからかなあ、あの日は帰りが大変だったよ」。記憶がとんでおられるのと、やはり御子柴先生もロシアの麗水の強度をめぐっては普通の人なのだ、とさらに尊敬してしまったのだった。

先生は研究室にお留守のときも余韻を醸された。あるとき見かけた、御子柴研究室のドアに掛けられたゼミ生向けの黒板。「痔で今日のゼミは休みます」。凡人にはなかなか公開発言できない一句だろう。仮に本当のことだったとしても（もちろん本当にそうだから切実なる内的表現の達成意欲から先生はそう書かれたのだ）、誰もそうは書かない。いろんな学生や見ず知らずの人がみな自由に行きかう当時の千葉大学普遍教育総合校舎A号館では、とくに。宮沢賢治が花巻で使った「下の畑におります」じゃないんだから。外国語セ

ンター時のあの３階に、宮沢賢治そのひと以上に衒わないフリーのそしてロシアの宮沢賢治がそこにいた。あの黒板の文字こそ本当の「普遍教育」じゃなかったでしょうか。

あのころ普遍総合校舎の中庭が僕は好きだった。おそらく外国語センター～言語教育センターの人間なら誰でもそうだろう。そう、Ａ号館とＢ号館とＣ号館とＤ号館とに囲まれたあの庭。切りとられた空間は、まるで大きな校舎に守られた秘密のスクエアのようで、Ａ号館とＤ号館をつなぐ両端の渡り廊下も、世界のヒトやコトバと自分をつなぐ優しいブリッジのようだった。五月はそこにネムの木の花。Ｄ号館の最上階から見下ろす時にだけ、その涼しい赤色を風になびかせてくれる。そこにはフランク・ザッパのギターのようにどこまでもねじれて永遠に延びていく風が吹き渡り、ここでコトバを学ぶ若者たちがこれから出て行く広い世界のことについて予感をめぐらすのを手伝ってくれた。放課後そんな熱っぽさとなぜか寂しさを感じたとき、Ｈ号館の自分の部屋まで帰ってくる廊下に御子柴先生の部屋の灯りが映っていると、僕はいつもノックした。先生の部屋はいつもひとの声がしていたから。それ以上に、御子柴先生は、ひとのひとへの懐かしさをそのままそのひとに伝えていいのだという真っ当な感覚へとひとを開放する温かさを持っておられたからだ。

ここでつながった。会いたいなあと思った時に会うことを開放してくれるカササギ。中国語で「カササギ」は“喜鵲”。また一度の出会いを懐かしい人と喜ぶための鳥。御子柴先生はその心性もカササギのそれに似ていると、僕は今度は世界に向かって思う。そう、七夕伝説でカササギとは、一年に一回、牽牛と織姫を天の川を越えて引き合わせるために遣わされる異人でもあった。韓国では国鳥に値する。2010年のいま、百年前の日本の行動をあらためて考えるための橋渡しもする鳥人だ。そのようなバイプレーヤーの鳥人ぶりもどこか御子柴先生のセンターにおけるスタンスに似ていたのではないだろうか。

いま僕には普遍総合校舎のあの四角い中庭の上空を、ソウルの鳥が尾をシュッと延ばして一直線に飛んでいくのが見える。それを見るたびに、またしても御子柴先生と美杯をコチンとやり、先生のあのカササギのような声と話をしたいと思う。先生にロシアの「カササギ」のことを聴いてみたい、そう思う。